

書くことと対象との link について

～字を書けないと訴える成年～

Writing and the LINK with the object

A case of a youth who says that he can not write

黒 崎 優 美

Hiromi KUROSAKI

しぎさんメンタルクリニック学園前

要 約

本稿の目的は、Bion の「精神病」に関する理論、特に精神病患者および「パーソナリティの精神病的部分」によってなされる、あらゆる「連結(link)」への攻撃について考察することである。攻撃は、対象やそれを気付かせる感覚器官の「分裂(splitting)」と「投影同一化(projective identification)」によってなされるが、ここでは文字を分裂したためにそれを取り扱うことができない成年について、Bion の理論を導入することにより理解を深めたい。Bion の理論は難解な上曖昧でもあるが、様々な臨床場面において応用することが可能であり、セラピストに「選択された事実」へと導く光を与えてくれる。

I. はじめに

本稿の目的は、Bion (1959)のいう、精神病患者或いはパーソナリティの精神病的部分によるあらゆる連結機能の破壊について考察することである。精神病患者は現実を知ることの辛さに耐えることができず、それを避けるために、連結機能を持ったあらゆる対象に対して、またそれらを認識する可能性のある自身の感覚器官に対して、投影同一化を用いた絶望的な攻撃を繰り返す。本稿では特に、これは Bion も重視したことであったが、言語を用いた対象との連結のすべてが破壊されたかのように振る舞う患者の例を取り上げ、患者にとっての言語への攻撃はいかに示され、そのことによって患者と対象との連結はいかに攻撃されるのかを示したい。

その前に、まず本稿の理論的基礎となる Bion (1957, 1959)の二つの概念、すなわちパーソナリティにおける精神病的および非精神病的部分について、さらにパーソナリティの精神病的部分によってなされる連結への攻撃について整理することから始めたい。

Ⅱ. パーソナリティにおける精神病的部分と非精神病的部分

「精神病人格と非精神病人格の識別」(1957)において Bion は、Freud (1924)が述べた精神病の特徴と Klein (1946)の投影同一化の理論を統合し、それを独自の枠組みによってさらに発展させている。まず Freud は、神経症と精神病とを鑑別する特徴の一つとして、自我と現実との関係に言及している。すなわち「神経症において自我は、その現実への忠誠からイドの一部分を鎮圧する。しかるに、精神病においては、同じ自我がイドに服して現実の一部から引きこもるという事実である」。この見解を受け入れた上で、Bion は、精神病における自我の現実からの引きこもりは部分的で、かつ幻想的なものであると考えた。そしてその幻想こそは、精神病者が心的かつ視覚的なすべての装置に対して攻撃をする際に用いる投影同一化の結果であるとして、Freud と Klein の考えを統合したのである。最終的に Bion は、パーソナリティにおける精神病的な部分と非精神病的な部分との共存という結論に辿り着いた。但し、ここで用いられる「精神病」という用語は、精神医学的な診断ではなく、一定の心的機能の仕方に相当するものである(Grinberg, 1993)。従って、一般的に診断名として用いられる精神病、特に精神分裂病とは、パーソナリティにおける精神病的部分による心的生活の支配の結果であるということになる。しかし、Bion が明らかにした重要なことは、あらゆるパーソナリティにおける二側面の共存ということであり、いかに重篤な精神病患者であっても現実との接触が完全に失われることはなく、部分的に現実との接触を保つことができる自我の能力によって、神経症的、非精神病的な現象もしばしば観察され、従って病理の水準によって左右されない治療的接近の可能性があるということである。

パーソナリティの精神病的部分には次の四つの特徴があると Bion (1957)は述べている、すなわち、破壊的衝動の優位、欲求不満への耐性のなさ、現実に対する憎しみ、そして対象同士や、対象と(内部、外部)的

現実を結ぶ機能を持ったすべてのものに対する攻撃である。あらゆる現実的対象（乳房、時間、空間など）はいくらかの欲求不満を伴うものであるが、いかなる欲求不満にも耐えることのできない精神病患者にとって、それらすべては彼を苦しめる悪い対象であり、それらから逃れる唯一の手段は、対象やそれらを知るための手段である自身の感覚器官や思考を分裂し、投影同一化によって排出することのみである。その結果、彼は欲求不満を和らげるための思考を用いることができなくなり、排出された自我部分と外部対象とが攻撃性によって結びついた奇怪な対象に取り囲まれていると感じるようになる。彼がそこから出ていくためには彼の痛みのもとである感覚器官や思考能力を取り戻す必要があるために彼は絶望的なジレンマに陥ることになる。それらの痛みを耐えることのできない精神病患者はますます分裂と投影同一化に頼るようになり、その結果「まるで彼の感覚器官は多くの細片に分裂され、対象に投影されることができるようになる」(p. 47)。精神病患者の投影同一化による連結への攻撃の結果である、対象や自我、それらの持つ機能の破壊された状態を Bion は「断片化」と名付けた。そしてこれらの見解を「連結への攻撃」(1959)の中でさらに発展させた。

Ⅲ. 連結への攻撃

対象関係論において Bion (1959)は、互いに繋がりを持つ対象だけでなく、それらの対象が持つ繋がり、或いは連結(link)の機能に初めて言及し、その重要性を主張した。精神病患者による連結機能を持ったすべての対象への攻撃の原型は、Klein (1946)の「妄想・分裂的態勢 Paranoid/Schizoid Position」における、乳児の乳房への攻撃であると彼は指摘している。但し Bion は、連結する対象そのもの(乳房、ペニス、言語的思考、情動など)よりも、その対象が持っている連結機能の方をより重視した。彼は機能を満たす対象とよりも、患者とその機能との関係について論じるために、連

結の概念を用いる。

精神病者が連結の断片化と投影同一化によってそれらを外部へ排出した結果は、患者と周囲の現実との連結が破壊された結果は、患者がそれらを扱うその様式、例えば患者と彼の用いる言語や思考、周囲の人との関係などの中に観察される。もちろん分析家も例外ではない。セッションにおいて攻撃・破壊される分析家と患者の連結について Bion (1959)は、彼の解釈を認めようとするがどもってしまっただけでそれを口にすることができない患者の例などを挙げている。Bion (1955)によれば、精神病者が用いる言語には三通りの様式がある。すなわち、言語は「思考」の手段、「コミュニケーション」の手段、そして「行動」の手段として用いられる場合があるが、精神病者にとって圧倒的に優位なのは、行動の手段として用いられる言語である。このような言語は、投影同一化によって細片となった自我部分を排出するためだけに用いられる「モノ」として扱われ、意思伝達やそれを可能にする言語的思考の性質を剥ぎ取られている。なぜなら、意思伝達や言語的思考を可能にする象徴化の能力を精神病者は持たないからである。象徴化は取り入れられる良い対象の存在に依存するが、精神病者は前述した奇怪な対象の世界に住んでいるためにそれらの対象を取り入れることができない。もしそれらを取り入れるならば、それらによってバラバラにされる痛ましい感覚を感じ、それに耐えることができないためにすぐさまそれらを投影同一化によって排出しなければならないからである。

象徴化の能力を持たないということは、それを可能にする思考能力を持たないということでもある。精神病者は欲求不満への耐性がほとんどないために、ものそれ自体の「表象(representation)」をもたらし「アルファ要素(alpha elements)」を生み出すことで欲求不満を改変する代わりに、ものそれ自体と区別されない「ベータ要素(beta elements)」を生み出すことで欲求不満を避けようとする。その場合、「思考を考える装置」の発達には妨害され、投影同一化が肥大し増加する。その結果、欲求不満や痛み、

そしてそのような状況の認識に関連するすべての事柄は永久に排除され続けることになる。もし欲求不満への耐性のなさが、回避の機制を用いるほど強くはないが、現実原則に勝るほどに強い場合には、そのパーソナリティは学習過程に代わるものとして全能感、全知感を発展させるようになり、真実と偽を区別し得る精神活動の機能は形成されないだろう。Bion (1959) は学習の代わりに精神病者が用いる「模倣」の能力について論じている。深刻な学習困難のある患者は、使いやすい模倣能力を用いてその困難を解決しようとし、対象がすること、見せること、教えることのすべてを物真似でそのままそっくり再生しようとする。模倣は正常児の学習の進展における一段階でもあるが、精神病児にあっては、それが象徴の理解や操作を基本とする学習のために貢献することがなく、投影同一化とこの模倣作用がその代わりに用いられ支配的となる。

IV. 連結の種類と様式

対象同士または対象と現実とを結ぶ連結について、Bion (1962) はそれぞれ三つの種類と様式が仮定されると述べた。三種の連結とは対象間 (X と Y) において、「X は Y を愛している」、「X は Y を憎んでいる」、「X は Y を知っている」というもので、Bion はそれぞれの連結を「L (love)」、「H (hate)」、「K (knowledge)」の頭文字で表した。対象同士は、愛によって、憎しみによって、また知の何れかによって結ばれていると言えよう。しかしこれらの連結は常に自由に表現されるとは限らない。内部的 (個人的)、或いは外部的 (社会的、対人関係的) な力によって抑えられたり抑圧されたりするからである。何らかの力によって抑えられた連結は 3 種の連結の否定的対極に位置し、それぞれ「マイナス L (-L)」、「マイナス H (-H)」、「マイナス K (-K)」と呼ばれる。マイナス連結は羨望とどん欲に特徴づけられ、その性質 (愛、憎しみ、知) に関わらず、両者にとって破壊的である (Symington & Symington, 1996)。これらの否定的な連結の何れかが二者関

係において支配的になったときには、その結果として、三者を破壊するであろう第三の対象が生まれることになる。

連結を別の側面からみた場合には、さらに三つの様式を仮定することができる。それはL、H、Kの何れかによって結ばれた対象間の在り方に関するもので、Bionはそれらを「共生」、「共存」、「寄生」と名付けた。共生とは、両者が互いに影響を及ぼし合い変化していく関係を表し、共存とは互いに影響を及ぼすことなく、従って何ら変化することなくある距離を保ったまま共に存在し続ける関係を意味する。寄生とは、一方が他方にその存在を全面的に依存するような関係の在り方を表す。

連結の種類と様式を結びつけるならば、マイナス連結は羨望とどん欲に満ち、破壊された連結という意味で、寄生もしくは共存の関係が支配的であると考えられる。反対に、三種の何れかの連結の場合には、その性質に関わらず、対象同士は互いに影響を及ぼし合い、変化したり発展したりする可能性を持つ共生の関係にあると言えるだろう。

連結は、治療的關係において体験される治療者と患者の情動的体験を明らかにしたり評価することにおいて役立つ。特に治療的關係はK連結の典型的な例であると言える。しかし治療の痛みや現実的な治療空間、時間、治療者の存在すべてに耐えることのできない患者は、前述したようにあらゆる連結を細片への分裂と投影同一化によって破壊しようと試みる。その結果、K連結はしばしば-K連結に取って代われ、治療の進展を妨げることになる。

本稿では、「文字を書く」ことを恐れ、書くことができないと訴える患者について考察することにより、Bion (1959)のいう連結の破壊について具体的に示してみたい。

V. 臨床例

20代の男性Mは、当時成績優秀な学生であったが、「文字が書けない」

と悩んでいた。週一回の私との面接は一年半を経過し、現在も継続中である。

我々の日常生活において文字を書くことは必須でありその機会は1日の間に多々訪れる。Mはそれを何とかこなしていたが、それにはこの上ない苦痛が伴うのであった。特にテストや人に書いた文字を見られるような場合にその苦痛は最大に強まった。つまり、Mが書けない文字というのは、人がそれを読むことのできるような、きれいな文字を意味していた。文字を書こうとすると、鉛筆を持った右手が震え、それを抑えるために左手を添えなければならなかったが、それでも満足のいく文字を書くことはできなかった。それを人に見られるということは、すなわちM自身が間違っただけに評価されることを意味していた。そのせいで、成績優秀にも関わらず、彼自身を文字だけで評価しようとするテストが耐えられないほど苦痛だった。Mは、テストの日が近づくに連れ非常に不安を強くし、このテストが終わっても、まだその先のテストやもっと先のテストで同じ思いをしなければならない、普通の人ならこの辛さに耐えられないだろうと嘆いた。彼の文字を提出した後にも不安は続いていた。なぜなら、もし採点者が彼の文字を読むことができなかつた場合0点になってしまうからである。しかし、前述したように、Mは非常に成績優秀な学生であったので、いつもテストでは良い点を取っていたのである。しかし彼はそのことにまったく満足していないようであった。その時には彼は、採点者が彼の文字を読むことができなくても関わらず、彼に同情して良い点を付けてくれているだけだと思うからである。彼はいつも彼の文字のために良くも悪くも正当に評価されていないと感じ、それを非常に不満に感じ、また恐れていたのである。どうやら、Mは彼に対する真の評価はもっともっと高いものであるべきだと感じているようだった。テストの問題は易し過ぎて、いつでも答えはすべて頭の中にあるのに、それを文字にしようとする別の何かに変わってしまうと彼はよく語った。具体的には、彼は頭で作り上げた長い文

章を、書くことの苦痛のために短く省略したり、箇条書きのように書いてしまったり、文字を構成する点や線をすべてつながっているように書いてしまうので、思うとおりの文章や文字を書くことができないのである。ある時彼は自由連想の中で彼自身に、書くことのできる文字とできない文字とがあることに気付き、それを語った。それによると、彼は英語が得意科目で、それはアルファベットを書くことが問題なくできるからだった。但し、常に彼は筆記体で（つなげて）それらを書き、ブロック体で（点と線を離して）書くときには同じ様な問題が起こった。その際は彼はため息をつきながら、「アメリカだったら何の問題もなく生きていけるかも知れない」と述べた。また、カタカナは比較的書き易い文字であったが、それを彼は「全部のカタカナで一つの塊のように感じる」と表現した。彼の文字の問題は幼少時より表面化しており、母親はその矯正のために習字を習わせた。そのためMは習字で書く文字も得意であったが、それは筆を使って書く毛筆に限られており、鉛筆で書く硬筆は不得意で、それは現在も続いていた。このときセラピスト（以下Th.）である私は、彼が二つの連結 link について語っているように感じていた。一つは彼の文字の書き方について、もう一つは彼の現実との繋がり方についてである。すなわち、彼は本来独立している文字と文字の間や、文字を構成する点や線の間を「つなげて」書くために、文字が読み辛く醜いものになってしまっていた。また、彼が書くことができるという文字は彼の日常生活に馴染みのないものばかりで、それはもっと細かい様々な連想から確認することができた。例えば、自分の名前の文字が書き辛いとか、カタカナでも彼が頻繁に書く機会のある「サークル」などの文字は他と同様に書き辛いと感じていたこと等である。そこでTh.は、Mにとって文字は常に彼を現実と結びつけるためのものであり、しかもそれは誤った悪いつながりであると感じられていること、Mが問題なく書くことのできる文字は、彼の現実的な生活や、彼が気にしている評価に影響しない文字であると伝えた。次の面接に訪れたMは非常に

沈み込んでおり、「自分が障害者であることを悟った、これからは一生、Th.のような専門家のサポートを受けて生きていかなければならない」と語った。それまでのMは万能感的思考が優勢であり、自分は誰よりも優れ、努力家である、故に誰よりも高く評価されるべきであると繰り返し語っていたのとは対照的であった。そこでTh.は、Mの文字は他者との連結を破壊する（伝えられない、誤解される）ために用いられており、そのことによつてのみ彼のプライドや万能感が保たれていたこと、なぜなら彼は、今感じているTh.との連結のように、彼の病気や弱さを糞便のような汚い文字に入れて書くことにより排出していたからであると伝えた。彼はその解釈に注意深く耳を傾け、その後絶望的な不安感是和らげられたようだった。

彼には本当の友達や恋人はいなかったし、これからもそのような人との本当の付き合いをすることはできない、また必要がないと彼は感じていた。なぜならそういう人たちと関わろうとすると必ず間に文字を介さなければならぬので彼は永遠に正当に評価されたり理解されることがないからである。彼にとって最も重要な他者は母親であり、非常に理想化された存在であった。彼が福祉系の専門学校に入ったのも母親のためであり、もし彼女が寝たきりになった時には、いつでも彼は身を投げ出し介護に専念すると明言していた。もう一つの理想化された存在は赤ん坊だった。彼は親戚の赤ん坊を抱いた時に二人きりの完璧な世界を感じたと語った。寝たきりの人や赤ん坊は、文字の読み書きや言語的なコミュニケーションを行わない。そこでTh.は、Mが良い関係を感じられる対象は言語を持たず、よつてコミュニケーションの起こらない、一方的で、Mに主導権のあるような場合だけであることを指摘した。

その頃、面接におけるMとTh.との間にも、言語的コミュニケーションに関する興味深い現象が体験された。というのは、Th.が解釈をしようとした時に、突然Mは身体をこわばらせ、石のように固まってしまったのである。同時にTh.は、話しているうちに、その内容よりも、眠っている赤

ん坊を起こさないよう子守歌を唄っているような感覚に陥っていた。それをMに伝えると、彼はこれをすぐに受け入れ、Th.が話し始めると同時に身体が石像のように固まって動けなくなり、場所や時間の感覚がまったくなくなったこと、そしてただTh.の声だけが彼の耳に届き、その間彼はずっとそのままにいたいと思うほど心地よかったというのである。そしてTh.の声は彼にとっても「言葉」ではなく「音」として彼の耳に届いていたのである。

VI. 考 察

これまで述べてきたように、精神病者は現実への耐性のなさから彼と現実とを結ぶすべての連結を分裂と投影同一化によって破壊しようと試みる。そしてMにとっては、文字を書くことがそれに相当していると考えられる。Mには文字と文字や文字を構成する点と線との現実的な繋がりを取り扱うことができなかった。彼はすべての文字を繋がっているように書いてしまうことで、それが本来果たすべき役割、すなわち人に何かを伝えることができなくなような文字を書いてしまったり、また一つの文章をぶつ切りに、ばらばらにしてしまうことによって、同じように伝えるための文章を書くことができなかった。すべてのカタカナは一つの塊であり、それらが独立しながら連なることによって新たな一つの意味を持つ文章を生むという事実を彼は理解できなかった。もちろん成績優秀なMはそのことを充分理解しているかのように文字を扱っていたが、それは彼を満足させなかったし、実際に彼は「塊」や「ばらばら」になってしまい彼に取り扱えなくなってしまう文字を感じていたのである。前述したように、Mは幼少時より文字を書くことが困難であったが、同時に学習の困難さも抱えていた。Mが語った当時の強烈な体験は、彼の成績が非常に悪いために、母親がつききりになって彼の勉強をみていたことである。彼の真向かいに座った母親の目線や眉間のしわを彼は恐れた。母親は無言であるが、彼が間違った答

えを書くとき表情を曇らせることにより彼にそれを知らせるのである。彼は鉛筆の動きによって母親の表情が変わることを恐れ、何も書くことができなくなってしまう。学習の困難さは彼が高校生になるまで続いたが、彼自身や母親の努力によって彼は現在のような成績優秀生となった。しかし、前述したように、彼はその成績にも学習することにも満足することができない。彼の学習の困難さは現在も続いているのである。Mは学校の勉強が簡単過ぎると言う。彼は真面目に勉強し、習ったことをすべて頭の中に入れるが、それをそのまま言うことはできても理解しているとは感じていない。つまり彼は答えを知っていてもそれらを取り扱うことはできないのである。それは彼が人と付き合うときの一方的で、相手を支配し所有しようとするかのような関係と似ている。彼はそれ以上変化したり発展したりすることのない答えの塊を頭の中に入れていただけなのである。そして Bion (1962)はそのような対象との連結の仕方を-K、すなわち「知」との否定的な連結と呼んだのである。それは知ることによって変化や成長を生み出すことのない、「所有」されるだけの知識であり、また、そのようにしてごまかされた学習の仕方を模倣と呼んだのである。そこで Th. は、Mにとって文字は現実を象徴するものであること、彼はそれを攻撃破壊することにより現実との接触を避けているという事実を解釈した。それは彼にとって迫害感を伴う悪いものとして取り入れられた。次の面接よりMは障害者である自分自身、そしてそれを感じさせるのは Th. であると語るようになる。Mにとって面接室は二つの意味で特別な場所であったが、それは Th. の分裂を意味している。すなわち一つには面接室は他の学生には必要のない場所でありそこに来て Th. に会うことでMは障害者となる。もう一つは、そこに来て Th. に会うことは唯一の彼をサポートできる相手に出会うことである。この時期は治療にとって非常に重要であり、患者をこの体験や感覚から引き離さないようにすることが必要であると Bion (1959)は述べている。しかし Th. はそれができなかったように思う。彼が Th. によっ

て自身を障害者であると感じさせられているという迫害感や、余りに強烈だと彼が表現したような現実の痛みを充分 contain することができなかった。我々の連結も彼と周囲の友人、恋人、母親などの人々と同じように、どん欲で羨望に満ちたマイナス連結であり、その表現されない負の連結から生み出された第三の対象が「音楽のような解釈」であった。それはMとTh.を満たすものであると感じられたが、実際には成長や変化にまったく繋がらない現実を知る耳や口などの器官の分裂と排除の行為であった。しかしながら、同時にMは徐々にTh.との面接が痛みに耐える体験であると感じ始めていたようにも思う。今や、Mは解釈を受け入れ理解し痛みとして体験することと、面接をトイレのように扱い、彼の悪いものをため込んではTh.の元へやって来て吐き出す（充分それがたまるまでの間彼はやって来ない）ことを繰り返している。

Ⅶ. 終わりに

対象関係論において、Bion (1959)は初めて対象同士の連結の意味を、また精神病者やパーソナリティの精神病的部分はなぜ、どのようにしてそれらを攻撃破壊するのかを教えてくれた。Mが文字を取り扱おうとするときに、彼が現実を取り扱おうとしていないのだということを知る手掛かりを与えてくれた。連結に関するBionの理論は、彼自身が述べたように、診断名に関わらず、どのような場面でも患者と対象、特にTh.との関係を理解するために役立つだろう。

参考文献

- Bion, W. R., 1955. Language and the schizophrenic. *In New Directions in Psycho-Analysis*. London: Tavistock, 1955.
- Bion, W. R., 1957. Differentiaion of the psychotic from the non-psychotic personalities. *International Journal of Psycho-Analysis* 38 : 266ff. In *Second Thoughts*, 1967.
- Bion, W. R., 1959. Attacs on linking. *International Journal of Psycho-Analysis* 40 : 308ff. In *Second Thoughts*, 1967.
- Bion, W. R., 1962. *Learning from Experience*. London: Heinemann.
- Freud, S., 1924. The loss of reality in neurosis and psychosis. *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. 19, London: Hogarth Press.
- Grinberg, L., Sor, D., and Bianchedi, E., 1993. *New introduction to the work of Bion: New Edition*. London: Jason Aronson Inc.
- Klein, 1946. Notes on some schizoid mechanisms. *International Journal of Psycho-Analysis* 27; and in *Developments in Psycho-Analysis*, 1952.
- Symington, J., & Symington, N., 1996. *The clinical thinking of Wilfred Bion*. London: Routledge.